

一、後西院天皇御詠の懷紙
後西院御懷紙、谷梅といふ題にて、

流れ出て散し後こそそれとしれ花咲く梅も谷の埋木
此歌意味深長し、可味也。

世の中の人のうへにもかけてみよ誰か心のまゝの繼橋

此歌は近世の歌にて秀逸とて、人々玩びぬ。後水尾帝御詠
吟といひ慣しけるに、さにあらず。麾下の士鈴木兵四郎と
いふ人の歌にてありけり。此人よく歌よみけり。山の新樹
といふ題にて、

おしなべて山はみどりに成にけり色こき方や松の村立

此二首同じ懷紙に書記し、當時の宗匠の日野縉薦家へ點を
請しに、二首共殊に珍重、堂上にも稀におもへるよし。そ
の懷紙みし人の物語と也。

一、梁蛻巖の詩韻に和す

春初得明石梁蛻岩信。用木李溪韻寄一律。因和其韻以
報答。

玄鶴卿來明月珍。一方消息復迎新。百年擇主水魚合。四海
論交兄弟親。屈指東都能賦客。屬心南浦卜居人。遙知林壑

風光好。莫遺絳帷辜負春。

蛻岩來詩

名山湧出器車珍。奎彩璧文天色新。九畹芝蘭皆可佩。一門
桃李自相親。當時北海金樽客。此日東都木鐸人。吾亦割雞
刀尚在。絃歌聊試郡城春。

一、鳩巢より大地昌言宛來書

兩の間不可容以毫髮の儀、其後とくと思案候へば、前説未
當かと存候。其に付重て工夫いたし候處に、而已者斷決之
辭。毫髮僭差以心言、先王制禮明白斷決如此。不可容毫
髮僭差之心。と申儀と存候。貴殿の説も大方叶申候へ共、毫
髮僭差は念慮の上にて申に不仕候ては聞え不申候。毫髮も
僭せんと思ふ念慮あるべからずと申儀と存候。最前か様に
見申候て、藤太夫殿など、語申候處、後に先頃申遣候通り
と存候て申進候得共、又よく考候へば、朱子の説に不可少
萌僭差之意と有之候へば心意上にて申詞と存候。是に相
定可申と存候。本より大義に關し申儀にて無之候へば、指
て心を盡し申にも不及候へ共、講じ申時分いかゞ可申哉と
存候故、右の通にて候。

一、拙子文集の事、御申越致承知候。我等存生の内に、草
稿出來を見申度も存候へども、貴殿居被申候故、安堵いた
し罷在候へば、見不申候ても其分にて候。死後如何様に成
共、青地殿御兄弟と御示談候て、世に残り申様にも成候へ
ばよく御座候。必しも板行に成不申ても、兎角同志の中に
残り候へば朽申まじく候。我等一生の文、華麗一過の文字
にて無之、每篇義理有之事に候へば、世に残り候はゞ、百
世の後子雲可有之存候。其内近年著申詩文取揃候て、其許
へ可進候。餘り多くは無之候。藤太夫殿、此度寫し候て御
越候分にて、しかといたしたる文は残り申まじく候。兎角

一つに取集め候て可遣候。先年御寫給候太極圖西銘、そろ
引出し候て、首尾いたさせ可申候。精神薄く罷成、細
密の所工夫の事、先年の通に不罷成、無念存候。論語も高
倉屋敷にて講じ申次に、少々記し申置事も有之、一篇成と
も成就いたし候て、手寫候て可遣候。

一、其御地御亡妣並亡妻石碑を、當年中に建被申度由、御
尤の事に存候。亡妻碑も一所に、御申付候様に頼申度候。
先年先妣平野夫人の碑は、鈔尺にて高さ四尺にいたし候か

と覺え申候。あれ程に無之候ても不苦候。兎角軽く可被成
候。周尺にてもいたし申候。碑銘の事、成程心得申候。其
内又御申越可有之候。只今は覺えすぎと無之、少し程過候
へば何事も致忘却候。よき時分其元より御申越候はゞ、取
しきり思案可申候。拙者亡女並亡男三兵衛石碑も、ちひさ
くいたし、名又は生卒の年月ばかり成共記し置申様に、其
時分序に建可申候。以上。

四月十四日 大地新八郎殿

鳩巢

一、北條貞將の眞跡

或日余奥村・笠間の二客とともに、山本基庸の第へ訪しに、
床頭に爲余懸軸を設けて言て曰。是は武藏守北條貞將の眞
跡也。貞將節義貞信、芳を百世に流といふべし。其遺墨ゆ
ゑ三十年前某が舊友葛有禎、常に愛之。然に有禎能州へ謫
せらる。海上の幽棲、書畫の清玩すら絶て無之由傳聞て、
或時其兄弟たる人の許より、従者を遣しける次で、基庸此
一軸を贈る。有禎甚感賞之と云。しかるに遙に歲月を経て
後、人を使ひて此軸を復し贈て云。某久しく世に有べから
ず、甚病衰しぬ。身死するの後、什器の一つもなく候へば、